

## 【福祉文化批評】

### 篠原拓也「運動会はどこへいくのか？」を読んで

藺田碩哉（名誉会員）

「運動会」という行事は、成人した多くの日本人にとって幼稚園から小中学校を経て高校時代まで連続と続く欠かせない思い出の一コマだろう。多くの人は年に一度の大きな「まつり」である運動会に胸ときめかせた経験があるだろうし、徒競走で一番を取ったうれしい思い出を抱く人も、その逆にみじめな敗北を喫して思い出したくない人もいるかもしれない。日本人の生活文化に深く根差してきた運動会が、コロナ禍のもとで開催できなくなるところが続出していることを契機に、改めて運動会の成立史やその社会的な意義、今後のあり方を問い直した論考である。

著者は『運動会と日本近代』（青弓社、1999年）の吉見俊哉氏ほかの論考を援用しながら、日本の運動会が持つ2重の性格—すなわちそれは明治国家の近代化政策の中で、国民の身体を調教し、国家に奉仕する良き兵士を育てるという要請を土台に出発しながら、それが地域に根付く過程で、江戸期以来の伝統的な祭りや儀礼を取り込み、次第に地域の祭りとして定着していく過程を明らかにしている。ただし、著者の叙述は「軍国主義日本」が瓦解した第2次大戦後の運動会については残念ながら言及していない。戦後、アメリカ主導の教育政策として持ち込まれた「レクリエーション運動」の考え方やプログラムが地域の運動会にもたらした変化や影響について知りたいところである。戦後の日本社会の変容と、運動会の変化（あるいは不変化）はどうであったのか—そこを抑えないと、今後の運動会のあり方について、説得力のある主張は難しい。

さて、福祉文化批評としてこの文章を見たとき、いちばんの不満は「福祉」という言葉がどこにも見当たらないことである。これでは「福祉文化批評」ではなく「教育文化批評」になってしまう。著者は地域

社会に焦点を当てて運動会を考察しているのだから、問題の枠組みとして「地域福祉」という視点を持つべきだった。地域の祭りである運動会は児童生徒の競技会であるとともに、子どもから高齢者まで、一家そろって弁当持ちでやってきて、ゴザを敷いて一日楽しむ「見世物」であり、娯楽の乏しい農村では、年に一度の貴重な「福祉の時間」であった。この側面から運動会が果たしてきた地域福祉としての役割や効用を論じれば、ユニークな福祉文化批評となったであろう。

著者への要望は次のとおりである。

- 1) 「地域福祉」という視点から、改めて近代日本の運動会を総括的に振り返ってみること。特に、第2次大戦後の復興期、高度成長期、その後の経済的停滞期における運動会の変容を検討すること。
- 2) それを踏まえて今日の運動会が抱えている諸問題—学校教育上の位置づけ、子どもの自由と抑圧、地域社会との関係等について批判的に考察すること。
- 3) これからの地域福祉の展開の中で、運動会を再定義し、新たな位置づけや内容の再検討を行うこと。

上記の視点に立った「運動会のこれから」について論考をまとめ『福祉文化研究』に投稿されることを期待しています。